

MyLibraryサービスの現状と可能性
－京都大学・同志社大学・立命館大学の事例から－

天 野 絵里子, 原 健 治, 石 井 奈穂子

大学図書館研究75号別冊
2005年12月発行
(pp.1～12)

MyLibraryサービスの現状と可能性

－京都大学・同志社大学・立命館大学の事例から－

天 野 絵里子, 原 健 治, 石 井 奈穂子

抄録：MyLibraryとは図書館ポータル的一种で利用者個人個人がカスタマイズできるサービスを提供するものである。1998年頃からアメリカでサービスが開始され、近年日本の大学図書館にも導入されつつある。他大学に先駆けて運用を開始した京都の3大学（京都大学・同志社大学・立命館大学）での経緯・サービス内容・問題点などを紹介し、比較検討を行った。またこれらの実例を踏まえて今後のMyLibraryサービスの新たな展開の可能性について取り上げた。

キーワード：図書館ポータル, library portal, MyLibrary, 統合検索システム, カスタマイゼーション, 電子図書館, デジタルコンテンツ, 京都大学, 同志社大学, 立命館大学, digital library, digital contents, integrated search, customization

はじめに

ここ数年間の、図書館界の新しいトレンドとして図書館ポータルやMyLibraryと呼ばれるサービスが脚光を浴びつつある。これらはいずれも個々の利用者ニーズに対応してサービス内容をカスタマイズできる機能を示すものであり、次世代の図書館サービスの方向性を探る上でも重要な機能であるといえる。

本稿ではMyLibraryの定義、歴史を概観し、他大学に先駆けてサービス運用を開始した京都地区の3大学（京都大学・同志社大学・立命館大学）の事例紹介をする中で、今後の可能性について検討を深めていきたい。

1. MyLibraryとは

MyLibraryと一般的に呼ぶ図書館サービスとは、図書館ポータル的一种であり、認証を経てログインしてくる利用者が、ウェブにあふれる学術資源や図書館サービス、データベース検索などを統合的に、一人一人がそれぞれのニーズに合わせた形でまさに「自分だけのための図書館」をウェブ上の環境に構築できるサービスのことである。

MyLibraryは、貸出情報の表示など、利用者固有の情報を解析して提供するパーソナライズ機能を備え、また、利用者による画面のレイアウト変更や「お気に入り」リンク集の作成といったことを可能にする、カスタマイズ機能を持つ。

ただし、後述する3大学のMyLibraryの比較からもわかるとおり、各MyLibraryが具体的に提供するサービス内容や、特徴的な機能はそれぞれ異なる。よって、MyLibraryに統合されている個別のサービス内容から、MyLibraryというサービスを定義

することはできない。各提供機関がMyLibraryにどの既存サービスを統合させるか、また、どのような機能を付加するかなどによってそれぞれに個性を発揮しているサービスであるともいえよう。

2. MyLibraryの発展

Yahoo!によるMyYahoo!¹⁾を始めとしてウェブ上には個人向けのポータルサービスが広く提供されており、そういった背景の中で図書館がMyLibraryのようなサービスを構想することはきわめて自然であったといえる。

ノースカロライナ州立大学図書館は1997年の調査で、利用者が「情報が多すぎる」ことに悩まされていることがわかった。そこで1998年に開始したサービスが、MyLibrary@NCState²⁾である。同サービスの開発推進者であるモーガンは、MyLibrary導入の目的を、そういった情報過多の解消と、資料の収集・選別・組織化・提供という伝統的な図書館機能やサービスをウェブ環境においても実現することであったという³⁾。このような導入の背景や目的は、以後現れた多くのMyLibrary類似サービスに受け継がれており、本稿で紹介する3大学のMyLibraryにも通じるものであるといえよう。

MyLibrary@NCStateは、利用者と図書館員とのコミュニケーション窓口であるというコンセプトも取り入れ、利用者の登録情報から研究分野に沿ったサブジェクト・ライブラリアンの連絡先や最新情報が選択表示されるといった図書館らしい、画期的なパーソナライズ機能をもいち早く取り入れていた。また、ソースコードが公開され、現在も多くの大学・機関における類似サービスのシステム構築に貢献している⁴⁾。ノースカロライナ州立大学がおそら

く最初にその名前を使ってから、同じようなサービスを指す言葉として「MyLibrary」という呼称も定着した。

ロスアラモス国立研究所のMyLibrary@LANL⁵⁾は、ある利用者が作成したリンクを他の利用者と共有できるといった特徴的な機能を備えている⁶⁾。また、香港大学では、PalmなどPDA端末向けのMyLibraryサービスを提供している⁷⁾。このように、MyLibraryは、図書館の企画力によってはどのような構成して展開することのできる、発展性のあるサービスであるといえよう。

日本では、MyLibraryは、以前から図書館ポータルとの必要性と共に論じられていたが、実際にサービスとして運用されたのは2003年以降となる。図書館システムの一部としてベンダーの開発した商用製品を利用した例が多い。貸出更新やILL依頼、およびそれらの状況表示といった従来からあるサービスを統合し、さらにリンク集作成や横断検索などの多様な機能を備えたものが出てきた。

では次節からは、筆者達の大学でそれぞれ実際に運用されているMyLibraryサービスを概観しながら、さまざまな面から比較していくことにしたい。

3. 各大学のMyLibraryの状況

3.1 京都大学MyLibrary⁸⁾

1) 導入の経緯

京都大学のMyLibraryサービスは、増え続ける電子的な資源やサービスを利用者がさらに便利に活用できるサービス、また、より個人個人の学習・研究ニーズに対応した利用者志向の新しいサービスを目指し、第5期図書館システム(富士通製iLiswave)の一部として構想された。2001年7月に機能要件等をベンダーである富士通に提案し、富士通も同様のサービス機能の開発を検討していたため、共同プロ

ジェクトとしてMyLibraryシステムの構築を開始した。サービス内容や機能については先にあげた米国のMyLibraryサービスを特に参考にしながら、システムそのものは富士通が独自に設計したものである。プロジェクト全体を通じて、電子的な図書館サービス・資源になるべく多く連携することや、親しみやすい操作性、魅力あるインターフェースの実現に重点を置いた。

2003年10月に一般利用者向け試行提供開始、2004年4月には本格的なサービスを開始した⁹⁾。

2) システム構成

次節同志社大学と同様である。

3) 利用対象

京都大学MyLibraryは、大学構成員(約29,000名)全員を利用対象としている。ただし利用を開始するには図書館でまず登録する必要がある。2005年3月時点での有効登録利用者数は約1,000名であった。

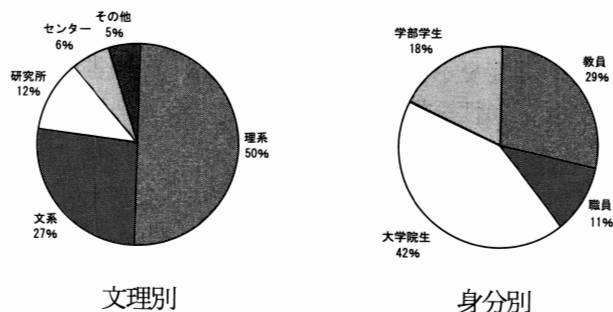


図2 登録利用者割合 (2005年3月末)

4) 認証

ログイン時の認証は、図書館システムであるiLiswaveがおこなっている。IDとパスワードは、従来から提供していたSDIサービス(SwetScan論文情報による文献速報サービス)、及び、2005年4月に開始したオンライン複写依頼等と共通であるが、それぞれのサービスを利用するたびにその都度ログインする必要がある。

5) サービスの内容¹⁰⁾

京都大学MyLibraryの特徴は、まず、カスタマイズが可能なリンク集を複数組み込むことができる「BookShelf(ブックシェルフ)」という機能を活用し、多様なリンク集を提供していることがあげられる。電子ジャーナルリストや情報検索に必要なリンク情報などは従来から図書館のウェブサイトを提供しているが、MyLibraryを通じて提供することによって、利用者はその豊富なアクセスポイントから取

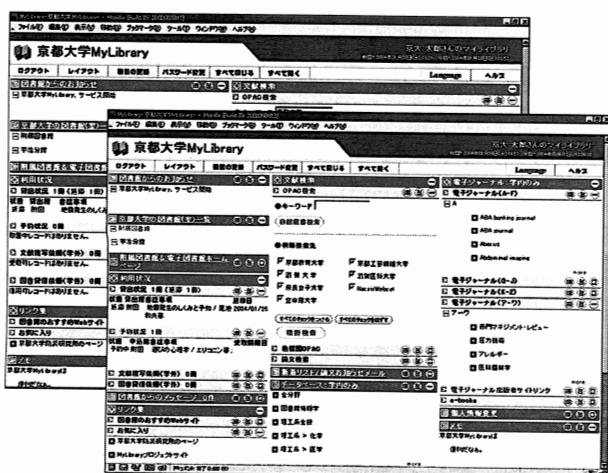


図1 MyLibrary画面

捨選択し、自分なりのリストに編集することが可能となる。

また、オンライン文献複写依頼や貸出情報などの図書館業務システムと連携し、ウェブ上で受けられるほとんどの図書館サービスの状況確認ができる。

以下に、提供している主なコンテンツや機能を具体的にあげる。

①告知

ログイン直後に重要なお知らせを画面に表示することができる。

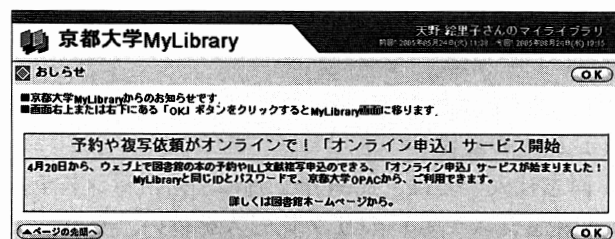


図3 告知画面

②図書館からのお知らせ

新しいデータベースの提供開始など、図書館からのニュースを随時掲載する。

③BookShelf

- ・電子ジャーナルリスト
- ・データベースリスト
- ・図書館／室一覧リスト など

④お気に入りリスト

Bookmarks機能と呼んでいるとおり、ブラウザの「お気に入り」や「ブックマーク」機能と同様、タイトル・URLを登録することによって、自由なリンク集を作成できる。さらに、BookShelfの項目を取り込む「参照追加」という機能もある。

⑤メモ

メモを保存することができる。

⑥利用状況照会

予約状況，貸出状況，複写依頼／貸借依頼の進捗状況をリアルタイムで参照できる。

⑦京都大学OPAC検索および近隣大学OPAC横断検索

検索フォームを設け、利用頻度の高い所蔵検索を効率よくおこなえるようにしている。

⑧画面レイアウトの変更

左右2段組になっている初期画面を1～4段組に変更したり、各サービス単位を自由に並び替えたり追加／削除することが可能。また、各サービス単位を小さく表示したり、全画面に表示したりできる。

6) 運営体制とメンテナンス

開発段階からサービス開始後しばらくは、数名で構成されるワーキンググループがベンダーとの意見交換や、データの初期投入及びメンテナンスをおこなっていたが、現在は附属図書館参考調査掛を調整役とし、各サービス単位のメンテナンスを関係部署で分担している。しかし、当初からMyLibrary関連業務が全学的な図書館業務の中に適切に位置付けられているとはいいがたいのが実情である。MyLibraryは縦割りの業務単位を横断するサービスであり、新しいサービスに対するスタッフの認識に差があったことが一因としてあげられよう。

さて、管理者が実際どのような作業をおこなっているかであるが、まず、MyLibraryをまったく初めて利用する利用者がログオンしたときに利用することになるデフォルト画面のレイアウト設定は、通常のログイン画面から管理者用の権限をもつIDでログインすると可能になり、一般利用者がレイアウト編集の際に利用するのはほとんど同じ画面でおこなうことができる。ブラウザで操作可能であるので、非常に簡便である。

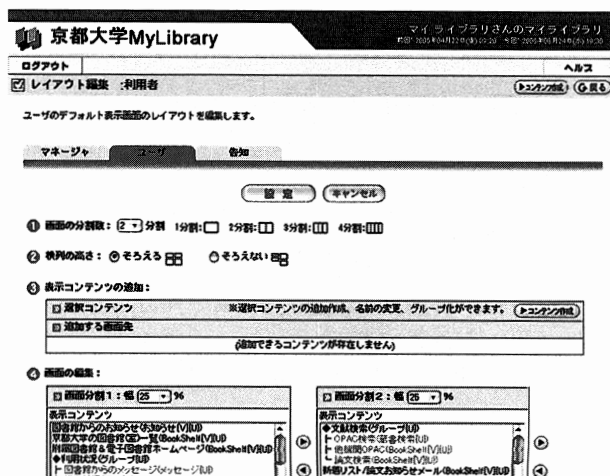


図4 管理者用レイアウト編集画面

BookShelfの項目データの編集は、1件ずつ、または全件一括の2つの方法から、リスト単位ごとに選択できる。全件一括登録の場合は、CSV形式のテキストデータを直接サーバ上に置いて所定の変換作業が必要であるが、1件ずつ随時更新する場合は、やはりMyLibraryの画面からおこなうことができる。

横断検索先の追加・修正は、ベンダーに設定を依頼する。

7) 利用状況

図5は、2004年度に採収した、利用者による操作要求回数(MyLibraryへのログインおよびボタン押

下等による操作要求の総数)の統計である。休暇中は利用が減るなど、おおむね学年暦に沿って利用されていることがわかる。学外サーバからの利用割合も多い。学内・学外を問わず、普段の学習・研究に活用してほしいという期待におおむね沿って利用してくれているといえよう。

ただし、利用の絶対数は、登録人数や、京都大学の構成員全体の人数を考えると、非常に少ないと言わざるを得ない。

詳細な利用者調査はまだおこなっていないが、メールや聞き取りによると、MyLibraryでもっとも人気のあるサービスは、貸出状況の照会であった。今後、さらに詳しい利用者調査をおこない、導入効果を測る必要があるだろう。

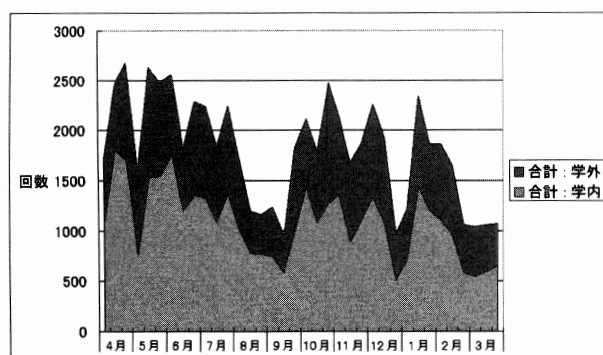


図5 月別操作要求回数(2004年度)

8) 問題点と今後の課題

まずは運営面の問題として、図書館の電子的なサービスとしての位置付けがまだ確実なものとなっていないために、適切な運営や広報が充分になされていないということである。

先にあげたスタッフの取り組み度合いも一因であるが、その他の要因として、MyLibraryシステムの機能面の不十分さがあげられる。ログインにかかる時間や動作時間が長すぎるし、BookShelfの追加・削除に関する機能に設計上の不具合が残っている。システムとしてはまだ開発途上であるといえよう。ベンダーと協力し、まずこれらの欠点は解消されなければならない。

次に、SDIやオンライン複写依頼等のシステムとはもちろんのこと、可能な限り学内の他の個人認証サービスとのシングルサインオンの実現も課題である。

以上のような機能面の改善をはかりつつ、MyLibraryをあらためて図書館ポータルとして電子的な利用者サービスの中核に位置付け、さらに質の高いリストの提供、利用促進のための広報、新たな機能やサービスの追加を推進し、MyLibraryというサービスの枠組みを活かしきる必要がある。例えば、分

野ごとのリンク集の提供、デジタルレファレンスとの連携などが考えられるだろう。

また、MyLibrary担当者に主にメールで寄せられた質問や意見などから、電子的なサービス全般についての利用者のニーズを把握することにもつながったが、中でも多くの要望があったのが、契約電子ジャーナルやデータベースへのリモートアクセスである。MyLibraryあるいは他の認証システムを経ることによって、学外から電子ジャーナルなどが利用できるとなれば、利用者にとっての利便性が高まり、高価な電子資源のさらなる有効活用にもつながるだろう。

3.2 同志社大学MyLibrary¹¹⁾

1) 導入の経緯

同志社大学では、2004年2月に学術情報システム(図書館システム)のリプレースを行い、それまでの汎用機による自館開発システムに代わり、富士通製パッケージシステムiLiswaveを導入した。その直後の同年4月に、iLiswaveのサブシステムとしてMyLibraryのサービスを開始した。本運用としては京都大学に次ぐ2例目である。なお、本学のシステムは同志社女子大学との共通運用を行っており、両大学に対して同様のサービスを展開している。

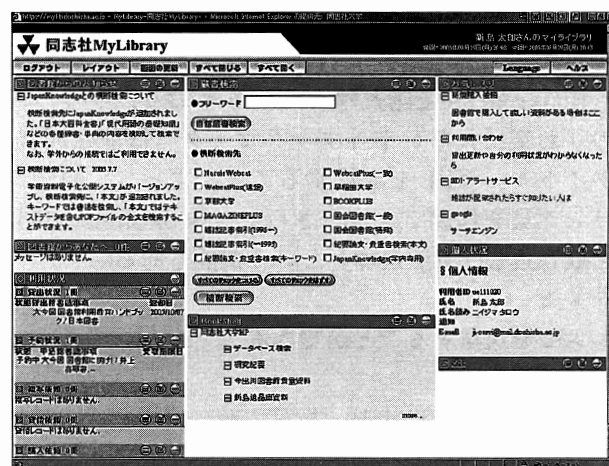


図6 MyLibrary画面(3段組表示)

2) システム構成

図7にある通り、図書館業務システムとは別にMyLibraryのサービスを構築している。また後述する横断検索サービス等との関連で他サーバとの連携が図られている。

3) 利用対象

同志社大学・女子大学両図書館利用対象者のうち、各大学の正規学生・専任教職員・嘱託教職員な

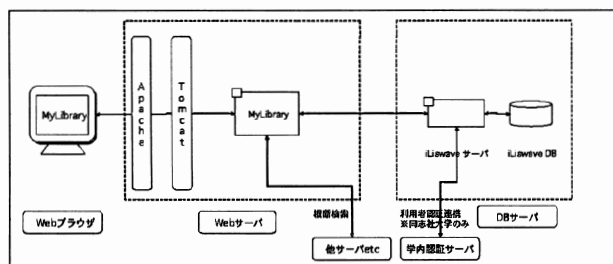


図7 MyLibrary システム構成

ど約32,000名である。2005年8月現在、卒業生はまだサービス対象としていない。

4) 認証

個人別ポータルであるので、利用者認証が必要となる。同志社大学・女子大学の場合は、学生や専任教職員については、e-mailやPCコーナー端末で使われる全学共通の認証システムを利用することとした。そのため学生の場合自動的にIDとパスワードが付与されるので図書館への申請は必要ない。なお、全学認証システムを利用しない嘱託教職員などは、図書館システム独自のIDとパスワードを発行している。また同志社大学と女子大学は別の認証システムを利用しているため、3種類の異なった認証システム（大学・女子大学・図書館）を併用することとなる。そのためログイン画面は、実行ボタンを3つ用意することにより、認証先を選択させている。

認証に伴うセキュリティ対策としてサービス開始当初からSSLに対応しており、2005年度からはペリサインのグローバルサーバIDを取得している。

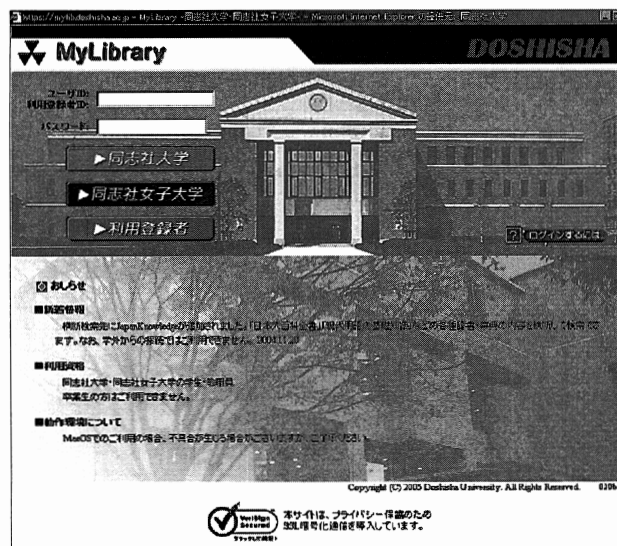


図8 ログイン画面

5) サービスの内容

同志社大学MyLibraryで展開する主なコンテン

ツや機能を具体的に列挙する。

①図書館からのお知らせ

一般的なお知らせで、講習会やデータベースの案内やサービス停止など、図書館からの広報を表示する。

②図書館からあなたへ

図書館から利用者個人への連絡事項を通知する。図書館システムにおいて、予約図書到着通知や延滞督促などの通知は自動的に利用者宛にメール配信されるが、その同一の内容を自動表示する。

③利用状況照会

貸出状況、予約状況、複写依頼／貸借依頼、購入希望の進捗状況をリアルタイムで参照できる。

④メモ

利用者自身が書き込めるためのフリーなメモ領域である。

⑤蔵書検索（同志社OPAC・横断検索）

タイトル・著者名・キーワードをベースに、同志社OPAC（DOORS）検索や、NACSIS Webcatや国立国会図書館などを統合して検索できる「横断検索」が可能である。また両大学契約データベースの一部も横断検索先になっており、「BOOKPLUS」「MAGAZINEPLUS」については学外からも参照が可能である。

検索先：同志社OPAC（DOORS）

同志社大学学術資料電子化公開システム

（学内紀要・貴重書画像）

NACSIS Webcat

NACSIS WebcatPlus

京都大学OPAC

早稲田大学OPAC

BOOKPLUS

MAGAZINEPLUS

国立国会図書館OPAC

雑誌記事索引（国立国会図書館）

JapanKnowledge（学内からのみ）

⑥Bookshelf

図書館が設定するリンク集。利用者側からは変更することはできない。

⑦お気に入り

ブラウザのBookmarkにあたり、利用者自身がURLを登録することが可能である。

⑧個人状況

利用者ID・氏名・通知情報・登録済みのE-mailアドレスを表示する。E-mailアドレスについては各利用者で設定・変更が可能である。

6) 運用体制とメンテナンス

図書館システムの保守管理を行っている情報サービス課情報サービス係が担当している。前節京都大学の例にもある管理者画面で「図書館からのお知らせ」などの設定を行っている。

7) 利用状況

ログインをしたことのある利用者数については2005年7月現在3,320名に留まっている。32,000名近くの利用者をサービス対象としている現状から考えると相当少ないといわざるを得ない。図9はMyLibrary認証画面へのアクセス件数の推移である。月毎のアクセス数は微増といったところである。

なお現時点での利用の多くは、貸出などの利用状況の確認や、学外からのデータベース利用となっている。

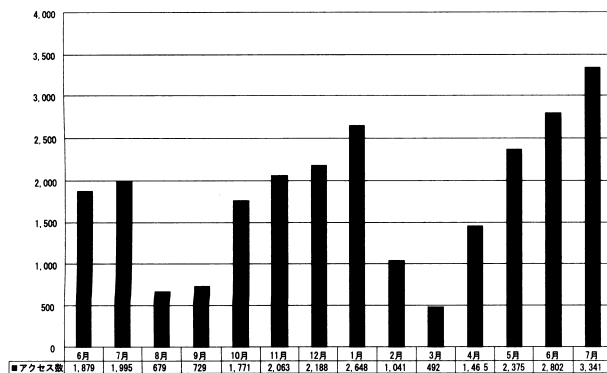


図9 MyLibraryアクセス件数（2004年6月～）

8) 問題点と今後の課題

①システム機能面での不具合

京都大学の節にも取り上げた通り、ログイン時及びクライアント起動時のレスポンスが遅い点が多い。この致命的な問題のため、利用者に不便を強いっている。

また、同志社OPACには「利用問い合わせ」機能を有している。「利用問い合わせ」にはMyLibraryでは実現されていない、貸出更新・図書予約・複写貸借依頼・購入希望申込が利用できる。そのためMyLibraryを利用する点の機能面での有意性に乏しいのが現状である。

ゆえに、ベンダーによるシステムの問題点の解消が望まれる。前者については改善を検討中であるとのことであるし、後者については前述のOPAC利用問い合わせやその他公開中のサービス（SDIアラート機能等）においてそれぞれのサービス利用時にその都度ログインを行う必要もある現状から、MyLibraryを介したシングルサインオン機能の実現が求

められる。いずれにせよOPACとMyLibraryの機能面での役割やシステム構成上の住み分けが必要であると思われる。

②運用体制

前述の通り図書館システム担当である情報サービス係がメンテナンスを行っているが、Bookshelfや各種サービス面での改善について不足している感を否めない。今後両大学で本格的に導入予定となる電子ジャーナルやデータベースなど各種電子化サービスの展開に向けて、レファレンス担当部門などとの連携を図る必要がある。システムの改善が前提となるが、利用者に対して積極的に広報することも必要となろう。

3.3 立命館大学MyLibrary¹²⁾

1) 導入の経緯

立命館大学では、2004年4月の立命館学術情報システム（RUNNERS）リプレイスに合わせて、MyLibraryを導入している。システムリプレイス時の基本方針の1つとして「学園の国際化・情報化にふさわしい電子図書館機能の強化」を置き、電子図書館の主たる機能を「インターネットを介して図書館のさまざまな情報サービスを自宅や大学内のパソコンから享受できるもの」として、利用者が使いやすいデータベースの横断検索、Web情報の収集・検索、フルテキスト検索などの実現を目指した。

2) システム構成

立命館大学では、図書館システムとして日本電気株式会社（NEC）の“E-Cats Library”を導入しており、MyLibraryはその機能の1つである。

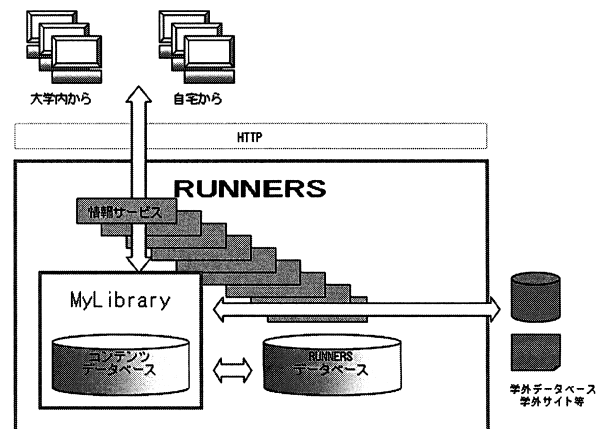


図10 システム構成図

3) 利用対象

利用対象者は、立命館大学に在籍する学部学生・大学院学生および教職員約35,000名である。入学、

着任と同時に立命館統合情報システム (RAINBOW) の利用ユーザIDが発行され、RUNNERS、MyLibraryも含めた利用が可能となっており、改めて申請する必要はない。学内端末からのアクセスだけでなく、自宅のブロードバンド環境からも利用することができる。

4) サービスの内容

利用者は、まず立命館大学図書館トップページにある、「MyLibrary」を選択することにより、MyLibrary サービスにログインすることとなる。

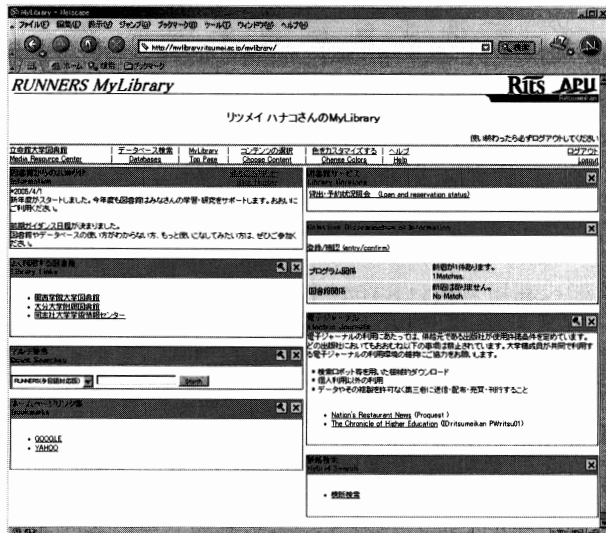


図11 MyLibrary トップページ

立命館大学 MyLibrary で提供しているサービスは大きく以下の 8 点である。

①図書館からのお知らせ

試験期間や長期休暇中の貸出条件や利用方法など、図書館からの最新情報を掲載している。

②貸出や予約状況の確認・貸出期間の延長

自分が借りている資料の貸出状況や予約状況の確認、貸出の延長を行うことができる。(従来は、館

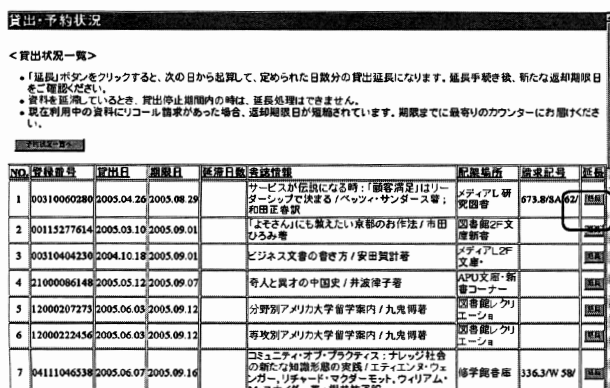


図12 貸出・予約状況画面

外貸出資料の貸出期間の延長処理は、図書館カウンターでのみ行っていた。)「延長」ボタンを押下することにより、貸出期間の延長が可能。

③ホームページリンク集

現在の研究・学習分野に関係のあるインターネット・サイトを集めたオリジナルリンク集の作成。

④研究分野に応じた電子ジャーナルリンク集の作成

電子ジャーナルのアルファベット順リストから、自分の研究・学習分野に応じたタイトルを選択し、登録することができる。

⑤SDI (Selective Dissemination of Information)
サービスの登録・状況確認

⑥複数のデータベースを利用した横断検索

例えば朝日新聞と日本経済新聞、Japan KnowledgeとMAGAZINEPLUSといった複数のデータベースを組み合わせて検索することができる。検索画面は本学で契約しているデータベースを、A) 目録情報、B) 二次情報、C) 全文情報、D) 新聞記事に分類している。

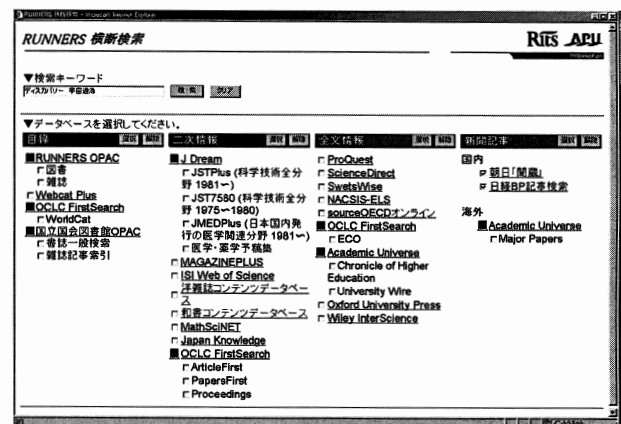


図13 横断検索画面

- A) 目録情報 RUNNERS OPAC
NACSIS-Webcat
OCLC FirstSearch
国立国会図書館OPAC
- B) 二次情報 J Dream
MAGAZINEPLUS
ISI Web of Science
洋雑誌コンテンツデータベース
和書コンテンツデータベース
MathSciNET
Japan Knowledge
OCLC FirstSearch
- C) 全文情報 ProQuest
Science Direct
SwetsWise

NACISIS-ELS
SourceOECD
OCLC FirstSearch
Academic Universe
Oxford University Press
Wiley InterScience

D) 新聞記事 日経テレコン
日経BP 記事検索
朝日新聞「聞蔵」
Academic Universe

⑦購入希望図書の申込(2006年度より本番稼動予定)

⑧学外への複写貸借申込(2006年度より本番稼動予定)

立命館大学 MyLibrary で提供しているサービスの中でも、電子ジャーナルリンク集は、利用者からの要望の高かった機能の一つである。電子図書館機能の強化に伴い、各種データベースの導入や冊子体から電子ジャーナル購読への購読形態の切り替えを行なう中で、フルテキストで利用できる電子ジャーナルのリスト化が望まれていた。現在4,000タイトル強を掲載している。

よく利用する電子ジャーナルを選択して、独自のリストを作成することも可能となっている。

上記機能以外にも、MyLibrary ページの背景色や

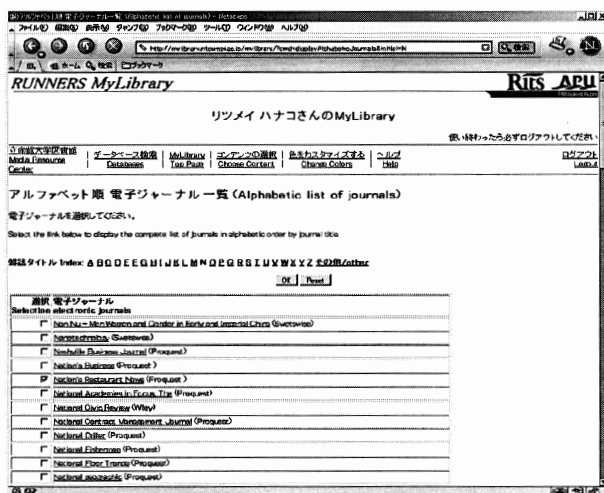


図14 電子ジャーナルタイトルリスト

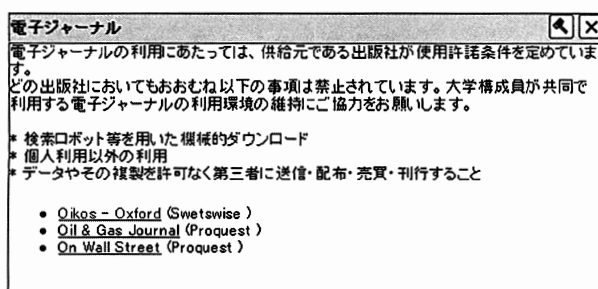


図15 電子ジャーナルトップページ

見出しの色を変更する機能も備えている。

5) 利用状況

2004年度の MyLibrary 利用統計は以下の通りである。数値は MyLibrary へのログイン回数を集計している。

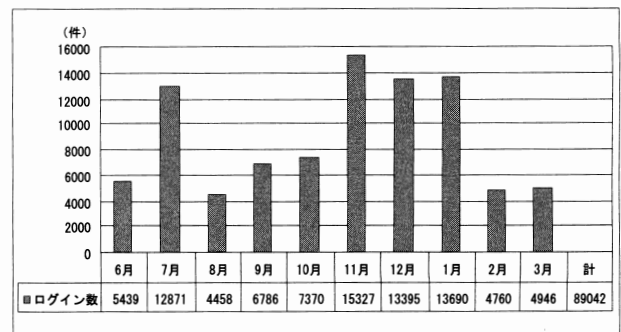


図16 2004年度 MyLibrary 利用統計
(ログ開始時期 = 2004年6月)

延べ利用者数は89,042名となっているが、この期間の実利用者数は、10,755名となっており、全構成員(約35,000名)の約3分の1が1度以上利用していることとなる。

学部毎の全構成員に占める割合別の利用状況を表したのが図17である。国際関係学部学生の44%、文学部学生35%が MyLibrary を利用していることが見てとれる。これら2学部は1人当たりの館外貸出冊数も多い学部となっている。他方理工学部、情報理工学部といった理系学部での利用があまり伸びていないため、今後はさらに広報や、講習会を展開していく必要がある。

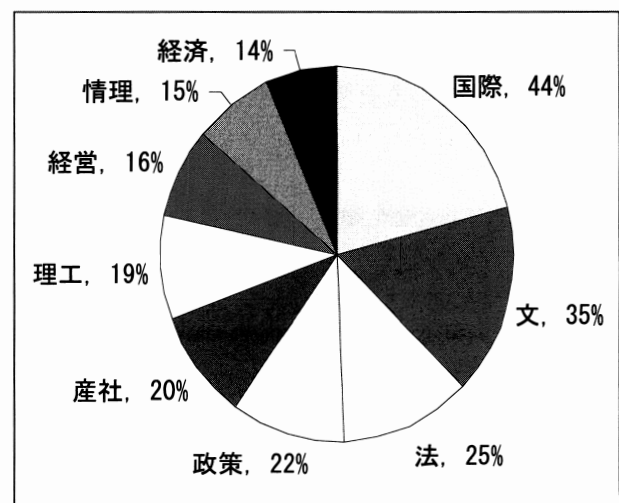


図17 学部別利用状況

6) 運用体制とメンテナンス

開発やシステム設計にあたっては、総合情報センター内に設置されたRUNNERS構築プロジェクト内のワーキングメンバーを中心に検討、ベンダーとのやりとりを進めてきた。安定稼働後は、図書館システムの運用管理を担当している衣笠メディアサービス課システム係（専任2名、契約職員1名、委託職員1名）が担当している。

管理者メニューは全てブラウザベースで提供されており、メッセージ管理や属性別のMyLibrary初期値設定などを簡便に操作することが可能である。電子ジャーナルに関しては、1タイトルずつの追加/修正機能に加えて、ファイル転送による一括追加機能も追加された。

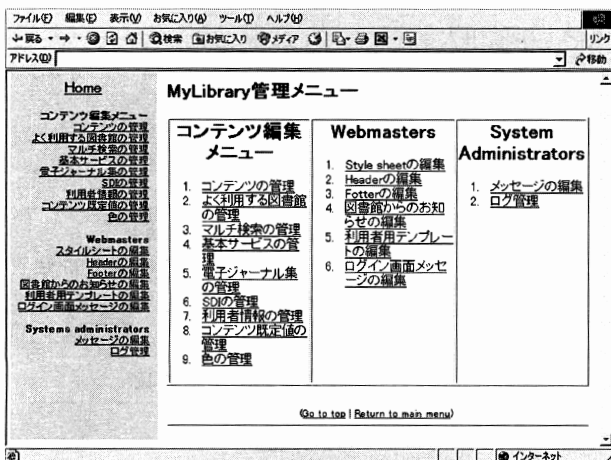


図18 MyLibrary管理メニュートップページ

7) 今後の課題

立命館大学MyLibraryの特徴点の1つに、今回比較した2大学に比してレスポンスが早い事があげられる（次節参照）。ログイン時や横断検索時、電子ジャーナルリストの表示など、ほとんどストレスを感じる事なく操作することが可能となっている。

また、立命館大学においては、今次学術情報システムのリプレースと同時にMyLibraryサービスを開始している。そのため、個人認証やカスタマイズできるサービスは全てMyLibraryを通して提供することが可能となり、図書館ポータルとしての機能を果たしていると考えている。その上で課題は以下の3点である。

①機能面の強化

MyLibraryで提供している電子ジャーナルリストとOPACデータベースとの横断検索機能は、現在提供していない。媒体を問わずジャーナル検索を行いたいという利用者の要望に応えるためにも検討を進める必要がある。

②広報体制の強化

現在、学部生、院生を問わず様々な講習会やガイダンスでMyLibraryを取り上げ紹介しているが、さらに利用促進を図る上でも広報強化が求められている。

③利用統計の精緻化

現在提供されているアクセス統計は、MyLibraryへのログイン回数のみである。利用者ニーズを詳細かつ的確に把握していくためには、コンテンツ（貸出、予約状況の確認、電子ジャーナルリストなど）毎のアクセス統計を取得することが必要である。

3.4 3大学MyLibrary機能の比較

本稿の3大学のMyLibraryについて機能比較を表1にまとめたので、ご確認いただきたい。

4. MyLibraryの今後の展開

このMyLibraryという2社の製品は紹介した3大学のみならず複数の大学ですでに導入がなされている。そのため今後各大学図書館において導入を開始する事例が増えることが予想される。

ただ本稿で述べたとおりサービス開始から日も浅いことから多くの課題が顕在するのも事実である。最後にこの課題から今後の展開についてとりあげることとしたい。

4.1 図書館ポータルの位置付け

図書館ポータルとしてのMyLibraryは、利用サービスの中心的存在となりうるものである。しかし本稿の京都大学・同志社大学の例では、既存の図書館システムのWebサービスで実現している貸出更新やILL申込の機能がMyLibraryには搭載されていない。それだけに認証を伴うサービスについてはMyLibraryに集約することによりパーソナライゼーションに関するサービスを一本化することが可能となる。ポータルとしてのMyLibraryを運用するにあたっては図書館サービスすべての窓口としての機能が求められている。

4.2 e-リソースへのアクセスの中心的存在

大学図書館においては、急速に外部データベース、電子ジャーナル、電子ブックなどの導入が進んでいる。これらの動きにみられるように従来の図書・雑誌を中心とした冊子体以外の媒体への対応が求められている。これまでのOPACの枠を超えた情報検索のためのツールが必要と思われる。特に上記の媒体については契約面で所属利用者に限られるという特性から、認証を伴うポータルに検索機能を組み込む

表1 3大学の機能比較

	京都大学	同志社大学	立命館大学
URL	http://my.kulib.kyoto-u.ac.jp/	https://mylib.doshisha.ac.jp/mylibrary/myliblogin.html	http://mylibrary.ritsumeai.ac.jp/mylibrary/
ログインに要する時間	20～60秒	20～60秒	約3秒
認証	図書館業務システム	(学生・専任教員) 各大学認証システム (嘱託教職員) 図書館業務システム	大学認証システム
コンテンツの種類	告知・電子ジャーナルリスト・データベースリスト・お気に入り・メモ・利用状況照会・蔵書検索(自館OPAC・横断検索)など	図書館からのお知らせ(全利用者向け・個人向け)・利用状況照会・蔵書検索(自館OPAC・横断検索)・お気に入り・個人状況	図書館からのお知らせ・ホームページリンク集・図書館サービス・電子ジャーナル・横断検索・SDIなど
横断検索可能DB数	12(近隣の大学OPACおよびNACSIS Webcat)	10(京都大学, 早稲田大学, NDL, NACSIS Webcat, BOOKPLUS等)	22(内容に応じて4つに分類)
電子ジャーナルリスト	約6,000タイトル	なし	約6,800タイトル
予約	状況確認	状況確認	予約状況確認, 予約他キャンパスからの取り寄せ状況確認
貸出	状況確認	状況確認	状況確認 貸出延長, 予約延長
他キャンパスからの取り寄せ	なし	状況確認(予約情報として表示)	状況確認
購入希望	なし	状況確認	購入希望 状況確認(2006年度より本番稼動)
ILL 複写	状況確認	状況確認	依頼 状況確認(2006年度より本番稼動)
ILL 貸借	状況確認	状況確認	依頼 状況確認(2006年度より本番稼動)
レイアウト変更	可能	可能	可能
色の変更	不可	不可	可能
ブックマーク	可能	可能	可能
メモ	可能	可能	不可

ことによるメリットは大きいと考えられる。これらを含めた学内のみで流通するメディアへの対応も求められよう。

4.3 他のポータルとの関係

図書館サービスにおいてポータル機能を各大学のポータルサービスと融合できれば利用者からのアク

セスが容易になると思われ、実際に実現させようという動きもみられる¹³⁾。この場合には、他のポータル機能との間でシングルサインオンに柔軟に対応できる機能が必須といえよう。

本稿で取り上げた同志社大学と立命館大学の例では、全学の認証システムに対応しており、シングルサインオンの実現可能性はあると思われるが、他の

学内システムとの融合という点において今後の課題である。

4.4 他業界のポータルと同機能のサービスの実現

前述のとおり、一般的な商用向けシステムにおいてはポータル機能が充実してきている。MyYahoo!のようなディレクトリサービスやamazon.co.jp¹⁴⁾のような商品購入のサイトではログインにより様々なパーソナライズされた情報を表示させることができる。そのような環境の中で利用者(大学図書館においては学生・教職員、場合によっては卒業生などの一般利用者を含む)を満足させられるようなサービスが求められる。

4.5 利用者教育

サービスを利用するにあたっては、利用者側に広く機能を理解してもらうために講習会などの手段で広報する必要がある。近年大学図書館では情報リテラシー教育という視点から図書館に関する利用者教育が課外のみならず正課においても実施されている。情報検索という観点からポータルについての関心を高め、利用を促進することが求められている。

おわりに

京都大学と立命館大学では、MyLibraryサービスの構想とベンダーによるシステム開発が平行しておこなわれたが、これから初めてMyLibraryを導入する大学では、同志社大学と同じように、パッケージシステムとしてのMyLibraryが最初の選択肢となるであろう。

しかし、はじめに述べたように、本来MyLibraryサービスは、大学ごとのサービスポリシーに沿って多様な構成にすることが可能であり、大学の個性や利用者のニーズをもっとも反映できる可能性を秘めた図書館サービスである。MyLibraryサービスの導入を検討するにあたっては、既存のパッケージシステムの仕様にとらわれることなく、大学の規模やスタッフ体制に応じて何をどのようにサービスしていくかを優先してサービス内容を議論されたい。

本稿で取りあげた3大学のMyLibraryにはまだそれぞれに課題や問題点が残されている。しかし、次世代の図書館ポータルサービスとして、MyLibraryは今後全国的に多くの大学に普及するものと思われる。ベンダーによる必要な機能の改善とともに、各大学の図書館員による、さらに新しいMyLibraryサービスの創出を期待したい。

注

- 1) Yahoo Japan Corporation. My Yahoo! (online), available from<<http://my.yahoo.co.jp/>>, (accessed 2005-10-6).
- 2) North Carolina State University Libraries. MyLibrary@NCState. (online), available from<<http://my.lib.ncsu.edu/>>, (accessed 2005-8-23). ノースカロライナ州立大学図書館はこのシステムでのサービスは2005年いっぱい終了するとし、すでに8月には新しいMyLibraryサービスを開始している。
- 3) Morgan, Eric Lease. Personalized library interfaces. Exploit Interactive. Issue 6, 2000. (online), available from<<http://www.exploit-lib.org/issue6/libraries/>>, (accessed 2005-8-22).
- 4) Morgan, Eric Lease. MyLibrary. (online), available from<<http://dewey.library.nd.edu/mylibrary/>>, (accessed 2005-8-23).
- 5) Los Alamos National Laboratory. MyLibrary@LANL. (online), available from <<http://library.lanl.gov/lww/mylibweb.htm>>, (accessed 2005-8-26).
- 6) Luce, Rick ; Di Giacomo, Mariella. Personalized and collaborative digital library capabilities : responding to the changing nature of scientific research. Science & Technology Libraries. Vol.24, no. 1/2, 2003, p.135-152.
- 7) The University of Hong Kong Libraries. My Library@Hand. (online), available from<<http://lib.hku.hk/mylib@hand/>>, (accessed 2005-8-23).
- 8) 京都大学附属図書館. “京都大学MyLibrary”. (オンライン), 入手先<<http://my.kulib.kyoto-u.ac.jp/>>, (参照 2005-8-26).
- 9) 天野絵里子. ひとりひとりのための図書館をー京都大学MyLibraryー. 大学の図書館, No.363, 2004, p.28-30. ゲストIDでログインすれば京都大学MyLibraryを実際に操作することができる。
- 10) 京都大学附属図書館. “「京都大学MyLibrary」の紹介”. (オンライン), 入手先<<http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/MyLib/enter.html>>, (参照 2005-10-6).
- 11) 同志社大学. “MyLibraryー同志社大学・同志社女子大学ー”. (オンライン), 入手先 <<https://mylib.doshisha.ac.jp/mylibrary/myliblogin.html>>, (参照 2005-10-6).
- 12) 立命館大学. “RUNNERS MyLibrary”. (オンライン), 入手先< <http://mylibrary.ritsumeai.ac.jp/mylibrary/>>, (参照 2005-10-6).
- 13) 逸村 裕. “図書館ポータル”. 変わりゆく大学図書館. 逸村裕, 竹内比呂也. 東京, 勁草書房, 2005, p.58-66. (ISBN 4-326-00029-5)
- 14) Amazon. com, Inc. “Amazon.co.jp”. (オンライン), 入手先<<http://www.amazon.co.jp/>>, (参照 2005-10-6)

<2005.8.31 受理 あまの えりこ 京都大学附属図書館情報サービス課参考調査掛, はら けんじ 同志社大学総合情報センター情報サービス課情報サービス係長, いしい なほこ 立命館大学総合情報センター衣笠メディアサービス課>

AMANO Eriko, HARA Kenji, ISHII Nahoko

Present situation and future prospects of MyLibrary Service

– A Review of the Experiences of Kyoto University, Doshisha University and Ritsumeikan University –

Abstract: MyLibrary is a service that allows users to customize the library portal according to their individual needs. The service began in the United States in 1998 and has recently been introduced to Japan as well. Three universities who were pioneers in implementing the service in Japan (Kyoto University, Doshisha University, and Ritsumeikan University) compared the situations at their institutions in the areas of implementation, service components, and challenges faced. Based on their experiences, the authors look at the possibilities of new developments for MyLibrary services.

Keywords: library portals / MyLibrary / federated search interface / customization / digital libraries / digital contents / Kyoto University / Doshisha University / Ritsumeikan University